研究余滴

まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（一）

影山輝國

日本に残った『論語義疏』の鈔本の在処を探る作業を始めて以来、現在まで三十六本の所在を確認し得た。それは以下の通りである。

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵

○大槻本　十巻五冊　文明十九年（一四八七）写　周防国明倫館旧蔵　大槻文彦旧蔵　安田善次郎旧蔵　九行二十字

○宝勝院本　十巻十冊　室町写　宝勝院芳郷光璘旧蔵　森立之旧蔵　大槻文彦旧蔵　安田善次郎旧蔵　九行二十字

○林本　十巻七冊（巻第五、六缺）室町写　小嶋寶素旧蔵　林泰輔旧蔵　一～四冊九行十六字　七～九冊八行二十字

○江風本　十巻五冊　室町写　稲田福堂江風山月荘旧蔵　安田善次郎旧蔵　九行二十字

慶應義塾大学図書館蔵

○天文本　十巻八冊（巻第九、十缺）天文十年（一五四一）、十四年（一五四五）写　岡田真旧蔵　九行二十字

大東急記念文庫蔵

○延徳本　十巻九冊（巻第十缺）延徳二年（一四九〇）写　稲田福堂江風山月荘旧蔵　九行二十字

○久原文庫本　十巻十冊（巻第四缺）室町写　稲田福堂江風山月荘旧蔵　久原文庫旧蔵　九行二十字

○江戸本（久原文庫一本）十巻五冊　江戸写　久原文庫旧蔵　九行二十字

京都大学附属図書館蔵

○重文本　存巻二、四―八　六冊　清原良兼筆か　船橋家旧蔵　重要文化財　九行二十字
○京大本　十巻九冊（巻第四缺）　室町江戸間写　清原宣條旧蔵　八行二十字

前田育徳会尊経閣文庫蔵

○応永本　十巻十冊　応永三十四年（一四二七）写　与謝郡金谷寺旧蔵　九行二十字
○三宅本　十巻五冊　明治末写　三宅氏旧蔵本の写し　十行二十字

東洋文庫蔵

○上原本　十巻十冊　室町江戸間写　上原氏旧蔵　木村正辞旧蔵　八行二十字
○米沢本　十巻十冊　江戸写　米沢藩上杉家旧蔵　八行二十字

お茶の水図書館蔵

○宝徳本　十巻五冊　第一、第四冊は宝徳三年（一四五一）写　第二、三、五冊は慶長元和（一五九六～一六二四）補鈔　徳富蘇峰成簀堂文庫旧蔵　一・四冊十行二十五字　二・三・五冊八行十九字

龍谷大学大宮図書館蔵

○文明本　十巻五冊　文明九年（一四七七）写　西本願寺写字台旧蔵　六行二十字

国立国会図書館蔵

○国会図書本　十巻五冊　文明十四年（一四八二）奥書本の写し　鹿島則文旧蔵　九行二十字

足利学校遺蹟図書館蔵

○足利本　十巻十冊　室町写　足利学校旧蔵　重要文化財（別に第四巻を明治期に模写せる一冊あり）　九行二十字

天理大学附属天理図書館蔵

○清熙園本　十巻五冊　室町写　阪本準平清熙園旧蔵　石井光雄積翠軒文庫旧蔵　九行二十四字

神宮文庫蔵

○神宮本　十巻十冊　室町写　江藤正澄旧蔵　八行二十字

宮内庁書陵部蔵

○図書寮本　十巻五冊　室町写　宮内省図書寮旧蔵　九行二十字

蓬左文庫蔵

○蓬左本　十巻五冊　室町写　神村忠貞旧蔵（別に第一巻を江戸期に転写せる一冊あり）　九行二十字

都立中央図書館蔵

○青淵本　十巻六冊　室町写　渋沢栄一青淵論語文庫旧蔵　九行二十字

拙蔵

○桃華斎本　十巻五冊　室町写　大徳寺多福庵旧蔵　桃華富岡謙蔵旧蔵　石井光雄積翠軒文庫旧蔵　九行二十字

東京大学総合図書館蔵

○東大本　十巻五冊　江戸写　青洲渡辺信旧蔵　九行二十字

関西大学図書館蔵

○泊園書院本　十巻十冊　江戸写　藤沢南岳泊園書院旧蔵　九行二十字

静嘉堂文庫蔵

○静嘉堂本　存巻第二　江戸写　伊澤蘭軒旧蔵　九行二十字

新潟県新発田市市島酒造蔵

○市島本　十巻五冊　弘化二年（一八四五）写　十行十八字

萩市立萩図書館蔵

○萩図書館本　十巻五冊　江戸後期写　繁澤寅之助旧蔵　九行二十字

台湾故宮博物院図書文献処蔵

○寺田本　十巻十冊　室町写　寺田望南読杜草堂旧蔵　楊守敬旧蔵　九行二十字

○塙本　十巻五冊　室町写　塙保己一和学講談所旧蔵　黄村向山栄旧蔵　楊守敬旧蔵　九行二十字

○溯源堂本　存巻第一、四、七、八　三冊　巻第一は室町写、巻第四、七、八は江戸写　有馬氏溯源堂旧蔵　楊守敬旧蔵　八行二十字

○故宮本　存巻第四　一冊　室町江戸間写　楊守敬旧蔵　七行二十一字

○九折堂本　十巻五冊　江戸写　山田業広九折堂旧蔵　楊守敬旧蔵　九行二十字

○盈進斎本　十巻五冊　江戸後期写　盈進斎旧蔵　楊守敬旧蔵　九行二十字

○新井本　十巻四冊　江戸末明治初写　新井氏旧蔵　楊守敬旧蔵　一～三巻・七～十巻　十行二十字　四～六巻八行二十字

右記以外に嘗て存在していたことは確かであるにも関わらず、今はその所在が不明な鈔本がある。

その第一は、有不為斎本である。これは武内義雄が大正十三年一月五日、懐徳堂から『論語義疏』十巻及び「校勘記」一巻を出版する際に、十本の鈔本（宝徳本・文明本・延徳本・清熙園本・足利本・久原文庫本・図書寮本・桃華斎本・泊園書院本・久原文庫一本）と共に校勘に用いたものであり、懐徳堂末期の門下生であった伊藤介夫（一八三三～一九一二）の有不為斎文庫旧蔵に係る。武内氏の「校

勘記」条例には、

凡五冊、毎半葉九行、行二十三字、疏双行、所挙注家、唯録姓、不録名、疑傚邢疏体者、其経注異同、則与文明本相似、考其書体、蓋亦慶元以後之物、旧蔵伊藤氏有不為斎、今託存大阪図書館、

とある。大阪府立中之島図書館に問い合わせたところ、大正七年七月、大阪府立図書館に寄託されたが、昭和十四年六月に寄託解約せられ、伊藤家に返却されたとのことであった。同年同月、大阪古典会主催の入札会に、『有不為斎文庫善本入札目録（有不為斎文庫御蔵書入札目録）』の六五八番「論語義疏　加藤景範手写　写五冊」として競売に附せられている。競売の際、この鈔本が何故、初期懐徳堂の門下生であった竹里加藤景範（かげのり）（一七二〇～一七九六）の手写であることがわかったのであろうか。またそれが事実であるなら、武内氏はどうしてそれに言及せず、慶長（一五九六～一六一五）・元和（一六一五～一六二四）以後の物であるとしか言っていないのか。『有不為斎文庫善本入札目録』には『詩律兆』など加藤景範手写のものが載せられているから、筆跡の特徴から誰かが推定した可能性もある。この鈔本は、昭和十四年、有不為斎文庫の一部を譲り受けた懐徳堂文庫にも見当らず、競売以来、杳としてその所在が知られないのである。

第二は、「皎亭本」である。内野五郎三皎亭文庫の旧蔵本であり、上段の写真は昭和六年五月、大阪府立図書館において論語展覧会が開かれた際に制作された『論語善本書影』（昭和六年六月三日　発行）に掲載せられたものである。その解説には、

古鈔論語義疏（図版第五十二）　十巻　十冊
内野皎亭氏蔵

界欄縦七寸一分五厘　内上欄一寸四分　横四寸三分　半葉九行　毎行二十字　注文双行　上欄無界線

聞く此書写は南北朝時代にして何晏叙の一篇は足利学

校本の影写なりと。宜乎本文の筆致古雅にして、上欄の書入も共に同筆、希代の巨壁。

とある。

川瀬一馬は『椎園』第一輯（昭和十二年一月三十日　発行）で、昭和十一年に行われた皎亭文庫の入札会で内野氏の蒐集した書籍が諸方へ散じてしまったことを惜しみ、「皎亭文庫の追憶」と題する一文を草しているが、その中でこの鈔本に関しては、

○論語義疏　十冊

室町末期写、邢昺疏をも含む通例の伝本、新注其の他の書入が若干ある。裏打補修仮綴。現存義疏諸伝本十数本の中、足利学校蔵の一本等と共に書風其の他より見て最下級に位するものである。

と述べ、「希代の巨壁」という評価を真っ向から否定し、重要文化財である足利本もろともかなり冷淡な扱いをしている。

この鈔本は、前述のごとく昭和十一年六月東京美術倶楽部において「皎亭文庫内野家並某家蔵品入札」が行われた際、六百十九円で落札された（「皎亭文庫内野家並某家蔵品落札価格表」昭和十一年六月二十二日）。これについて弘文荘反町茂雄はその著『一古書肆の思い出2　賈（かいひと）を待つ者』（一九八六年十二月　平凡社発行）の「入札は天国と地獄―内野皎亭文庫」の中で、『太平記抜書断片』とともに弘文荘を介して天理の中山正善の手に帰した旨を述べている（二〇〇頁）。それならば天理図書館にあるはずであるが、『太平記抜書断片』は所蔵されているものの、皎亭本『論語義疏』は見つからなかった。天理図書館にはなお未整理の本があるとのことだが、反町氏の記憶違いがあるかもしれない。なぜならば、昭和十一年七月五日発行の『書誌学』第七巻第一号に祥渓生なる人物の「皎亭文庫入札後日譚」が載せられていて、そこには、「論語義疏　十冊　六一九」と書名・冊数・落札価格を表示した後、

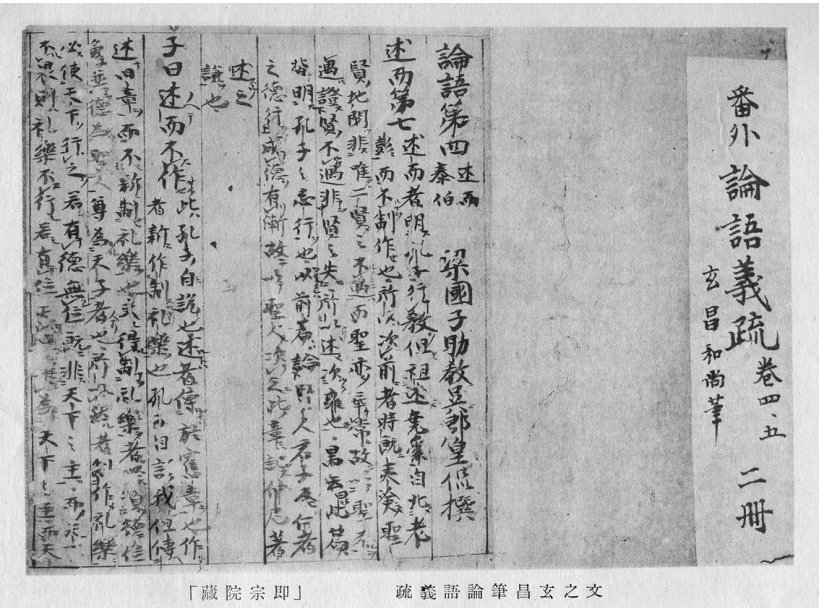
室町時代写本。九行二十字書写。中に邢疏が混じ、上層に新注が加はってゐる。足利のよりよい。

義疏が久しく出なかったので、朝倉屋・弘文荘等も落札価近くまで入れたらしいが取れなかった。

と記されているからである。

なお、天理図書館には清熙園本が昭和三十一年十一月一日の登録印で、所蔵されている。

第三は、「文之本」である。東福寺即宗院旧蔵に係るもので、次頁の写真は昭和十三年四月一日発行の『史蹟と古美術』第二十巻第三号に掲載されたものである。この雑誌に、粟野秀穂は「南浦文之と其教化」と題する一篇を掲げ、



文之玄昌筆論語義疏　「即宗院蔵」

東福寺の即宗院に論語義疏四・五両巻を珍襲する。これについて見るに疑ひもなく、南浦文之和尚の自筆本である。

この書もと巻数多くあつたであらうが、今はこの両巻のみがこの寺の所蔵である。半紙に罫線を引き、其間に小楷を以て、章句註字を加へその傍に句読訓点を施して居る。文之は流石に学僧だけあつて、用意周到、しかも筆蹟もよく整ひ誠に天下の珍襲である。文之和尚にこの義疏ある事は西村天囚氏の日本宗（ママ）学史にも亦「宋学伝来」の淵源等にも散見せず、森大狂氏の「南浦文之和尚」にも見へて居らない。それ丈けに珍らしい書籍であつて、缺本である事は惜しい事ではあるがやむを得ない。これ丈けで文之和尚の朱子学史上の学僧たる位置と功蹟とを語るには、これで充分である。と述べている。これについて言及したのが村上雅孝で『近世初期漢字文化の世界』（平成十年三月二十日　明治書院発行）の第一章「文之玄昌と漢字の世界―中世から近世へ―」（一〇九頁）で、粟野氏の文を引用した後、

『東福寺誌』の慶長十六年十月二十二日の条には、

文之は東福寺、同塔頭、起春龍喜へ師事せしを以て同寺に（「に」、原文「へ」に作る）屢々往来あり、又（「又」の下、原文「、」有り）文之の書きたる『論語

義疏』第四・五の両冊、今（「今」の下、原文「、」有り）即宗院に在り、同好の士には得難き珍本なり。（原文「。」無し）

とある。これについて筆者が即宗院に赴き問い合わせた所、現在は所蔵していないし、その行方もわからないということである。『東福寺誌』の刊行は、昭和五年、粟野論文は、昭和十三年発表のものであるから、この文之手書の『論語義疏』は、少なくとも昭和の初め頃までには即宗院にあったということになろう。

（　）内は影山の挿入。

という。

私自身も東福寺即宗院へ行って尋ねたが、結果は村上氏と同様であった。文之は桂庵の遺風を継ぎ、新註に拠って、博士家の訓読を改めるべく「文之点」を創始した人物である。もし、この古注系『論語義疏』に対する文之加点の全容が判明したならばと思うと、惜しまれてならない。

（待続）

（かげやま　てるくに・実践女子大学教授）